

## $\alpha$ 溶血を呈するコロニーを形成した *S. agalactiae* の 1 症例

©西村 美咲<sup>1)</sup>、松永 智<sup>2)</sup>、友山 瑛人<sup>2)</sup>、佐野 加代子<sup>2)</sup>、佐藤 泰之<sup>2)</sup>、矢島 智志<sup>2)</sup>、山崎 悦子<sup>2)</sup>  
公立大学法人 横浜市立大学附属病院,附属市民総合医療センター<sup>1)</sup>、公立大学法人 横浜市立大学附属病院<sup>2)</sup>

【はじめに】*Streptococcus agalactiae* は Lancefield 分類で B 群に分類される溶血性レンサ球菌 (GBS) である。ヒトの消化管や生殖器に常在しており、新生児の髄膜炎や、糖尿病を基礎疾患にもつ患者を中心に、尿路感染症、生殖器感染症、敗血症などの起炎菌になりうる。GBS は、血液寒天培地上で 24 時間培養後に特徴的な  $\beta$  溶血性を示す直径 5mm 以上のコロニーを形成するレンサ球菌である。今回、当院で分離した非典型的な GBS を報告する。

【患者情報】84 歳男性。血尿を主訴に当院を受診。基礎疾患に 2 型糖尿病あり。当日の尿沈査では細菌 1+、白血球数  $\geq 50$ /HPF であった。グラム染色では、グラム陽性球菌が 1+、培養検査で  $1 \times 10^4$  CFU/mL の発育が見られ、*S. agalactiae* が検出された。

【細菌検査所見】培養条件は 5%CO<sub>2</sub> 下で 35°C・24 時間で、ポアメディア羊血液寒天培地 M70 (栄研化学株式会社) に培養し、 $\alpha$  溶血を呈するコロニー (①) と  $\alpha$  溶血環周辺に  $\beta$  溶血を呈するコロニー (②) の発育が見られた。それぞれのコロニーを釣菌し、質量分析装置 MALDI バイオタ

イパー (ベックマン・コールター株式会社) で測定を行い、両コロニーともに *S. agalactiae* (Score Value:①2.14、②1.89) と同定されたため追加検査を行った。追加検査はラテックス凝集反応 (ストレプト LA NX「生研」:デンカ生研株式会社) と CAMP テスト、選択分離培地ポアメディア Vi GBS 寒天培地 (栄研化学株式会社) (Vi GBS 寒天培地) での色調観察を行った。

【結果】ラテックス凝集反応はどちらも B 群に凝集が見られた。CAMP テストは陽性であったが、対照の *S. agalactiae* (標準菌株) の溶血と比較すると①は溶血が小さく、②は同等であった。Vi GBS 寒天培地では *S. agalactiae* のコロニーは紫色を呈するが、①、②ともに白色コロニーが発育し、紫色の呈色は見られず、非典型的な性状となった。

【まとめ】近年の微生物検査は遺伝子解析や質量分析が主流となりつつあるが、その結果と培地に発育したコロニーの特徴や生化学的性状などが乖離した場合は、従来の手法で確認することが必要である。

【連絡先】045-261-5656